

様式(9)

論文審査の結果の要旨

報告番号	<p>甲 保</p> <p>第 1 1 号</p> <p>乙 保</p>	氏 名	木 野 綾 子
審査委員	<p>主 査 友竹 正人</p> <p>副 査 田村 綾子</p> <p>副 査 近藤 和也</p>		

題 目

Different levels of awareness and knowledge of male climacteric in female nurses and female office workers (女性看護師と女性事務職における男性更年期障害の認識および知識に関する違い)

著 者

Ayako Kino, Hirokazu Uemura, Toshiyuki Yasui: Maturitas 80:198~204, 2015 に掲載済み

要 旨

女性更年期障害と異なり、男性更年期障害については情報や対策の普及は充分ではなく、認識や知識のレベルも国によって異なる。本邦ではマスメディアを通して男性更年期障害に関する情報は徐々に広まっているが充分ではなく、認識や知識に関する検討もほとんど行われていない。

本研究は、本邦女性が男性更年期障害をどの程度認識し、知識を有しているかについてその実態を把握し、看護職と一般事務職の女性における認識や知識の差、男性更年期障害への対応に関する考え方について検討することを目的としている。20歳から65歳の女性看護師と女性事務職員2800人を対象にして、男性更年期障害についての認識や知識に関して質問紙を用いて調査を行った。その結果、看護師および女性更年期障害を経験したことがある女性は、男性更年期障害をよく認識していたこと、「抑うつ気分」「易刺激性」「神経過敏」「睡眠障害」といった症状は男性更年期障害と捉えていたが、性的機能に関する症状については充分捉えられていなかったこと、更年期障害を経験した女性では男性更年期障害について共感できる割合が高いことが確認できた。本邦における男性更年期障害の認識や症状や治療に関する理解は充分ではなく、正確な情報を伝えていくことが必要であると思われた。

以上のことは、本邦における男性更年期障害に関する認識や知識の程度に関する新しい知見であり、女性更年期障害と同様に男性更年期障害が社会で広く認識されるために男性更年期障害に十分な理解をもった女性を対象に教育していく必要性を示しており、本研究の社会的意義は大きく、博士の学位授与に値すると判定した。